3. 診断支援システム

病理検査室に患者さんの検体が届き、受付と同時に各検体固有の病理番号を発行します。以後全ての工程で、QRコードを読み込むと、病理番号に紐づいた検体情報が表示されます。加えて、組織を切り出した後に小分けするカセットへの印字（写真4）、ガラス標本への印字（写真5）など、これまで技師が手書きしていた業務は自動プリントされるようになり、書き間違いがなくなります。

病理医は、ガラス標本に印字されたバーコードを読み込んでから診断するので、患者取り違えのリスクも大きく減少します。

（写真 4）切り出し

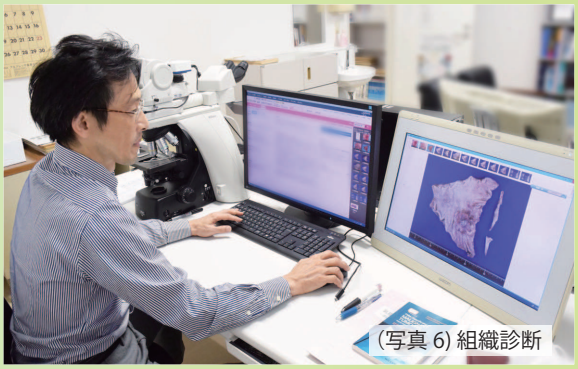
病理診断システム（WebPath、正晃テック社）の更新に合わせて、電子カルテや会計システムとも双方向に連携しました。

依頼医や責任医師には、病理診断が確定された旨の通知が届き、その診断書を確認してボタンを押すと、病理診断システム側に「確認済」の通知が戻ります。これは医療安全に関する取り組みの一つであり、病理診断の見落としや治療の遅れに繋がらないよう、依頼医とのスムーズな意思疎通を目指したものです。

また、病理診断にはコスト計算の複雑さや外来受診とのタイムラグがあるため、手作業での会計処理には事務・検査室ともに苦労がありました。新システムでは特殊な加算を病理医と検査技師が選択し、遅滞なきよう会計課に送信します。保険点数の改定に際しても、従来よりも対応が簡便になることを期待しています。

（写真 5）薄切

過去の病理診断の確認、肉眼写真の取り込みやマッピング（写真6）、進捗状況の把握、採取臓器名の入力補助、規約項目の記載、スタッフ同士の意見交換（写真7）など、多くのステップが効率化されました。システム自体が安定していて反応が早いため、ストレスなく診断に向かうことが出来るようになりました。


（写真 6）組織診断

今後はより早く、正確な診断をお返しできるよう努めてまいります。病理DXの恩恵を感じていただけるよう、他科・院外の先生方と連携を深めたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いします。

（写真 7）新システムと大型モニターの連携

病理診断科チームとシステム管理課スタッフ

病理診断科のホームページはこちら！